様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：２２７０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１０７２３

研究課題名（和文）専門看護師の実践知の伝播・継承を促進する事例検討モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a case study model to promote the propagation and transfer of practical knowledge of Certified Nurse Specialist

研究代表者
嵐　弘美（ARASHI, Hiromi）

川崎市立看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：５０４３９８３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、専門看護師の実践知を言語化し、伝播・継承するための事例検討モデルを開発し、検証することを目的として研究を実施した。
専門看護師の実践知の伝播・継承を促進する事例検討モデルは、フェーズ1：【事例検討の準備】、フェーズ2：【看護の意図と実践の言語化】、フェーズ3：【看護の意味・エッセンスの表現の精錬】、フェーズ4：【学会発表】の段階によって構成され、それぞれのフェーズを円滑に進めるためのポイントをまとめてモデルとして精錬し、専門看護師4名および事例研究の専門家1名のグループにより事例検討を重ねて検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
専門看護師が、本研究により開発したモデルを用いて事例検討を実施し、成果を公表することにより、専門看護師の実践知を言語化し、伝播・継承していくことにより専門看護師の発展に寄与することができる。また、質的研究として発展途上である事例研究方法のプロセスにおいて、事例検討方法のモデルを示すことで専門看護師以外の看護実践者が開催する事例検討の発展にも寄与する可能性がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop and validate a case study model for verbalizing, propagating, and passing on the practical knowledge of Certified Nurse Specialist.
The case study model to promote the propagation and transmission of practical knowledge of Certified Nurse Specialist consists of the following phases: Phase 1: [Preparation for case study], Phase 2: [Verbalization of nursing intention and practice], Phase 3: [Refinement of expression of nursing meaning and essence], and Phase 4: [Conference presentation]. The points to facilitate each phase were summarized and refined into a model, which was examined through a series of case studies by a group of four Certified Nurse Specialists and one case study expert.

研究分野：精神看護

キーワード：事例研究　事例検討　専門看護師

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

専門看護師（Certified Nurse Specialist 以下、CNS とする）は、多様化した医療ニーズに対応し、看護の質の向上に寄与する高度実践看護師であり、その実践知を言語化し、伝播・継承していくことが求められている。現状では専門看護師の実践の共有には事例検討が広く用いられているが、その効果的な方法やモデルに ついては明らかにされていない。 一方で、事例検討を研究的に用い、系統的な方法によって実践知の意味を明らかにし、伝播・継承することを目的とした事例研究が活発化している。しかし、専門看護師に焦点化した研究報告はみられない。そこで、CNS の抱える課題を克服し発展を促進するために、CNS の実践知を言語化し、伝播・継承していくために有効な事例検討モデルについて検討した。

２．研究の目的

本研究は、専門看護師の実践知を言語化し、伝播・継承するために有効な事例検討モデルを開発し、検証することを目的として研究を実施した。

３．研究の方法

(1)文献の検討：CNS の実践内容について検討する事例検討会に関する国内の文献のレビューを行い、CNS の実践知を共有するための事例検討の方法について示唆を得た。

(2)専門看護師の事例検討会の実態調査：精神看護 CNS の事例検討会におけるファシリテーター経験のある CNS5 名に、半構成的インタビューを実施し、内容を録音し、逐語録を作成した。逐語録を、質的に分析した。

(3)モデル案の作成と事例検討によるモデル案の精練

(1),(2)の結果により、山本ら（2018）の事例研究法を採用し、専門看護師の実践知を言語化し、伝播・継承するために有効な事例検討モデル案を作成した。モデル案をもとに以下の事例検討を実施し、モデルを精練した。各事例検討は、専門看護師の実践を振り返り記述したテキストをデータとし、提供した看護実践について、CNS４名と事例研究に精通した研究者１名で実施、評価した。

①職場不適応となった看護師の精神状態の悪化を防ぎ職場復帰を可能にしたリエゾン精神看護専門看護師の即応的なメンタルヘルス支援

②心身の不調が生じやすい看護職に対するリエゾン精神看護専門看護師による長期的な支援

③患者への対応に悩む看護師から寄せられた相談を起点とした精神看護専門看護師による複合的な実践

４．研究成果

(1)文献の検討：医中誌 Web 版により、2001～2021 年でキーワードを「事例検討会」「専門看護師」で AND 検索し、CNS の事例検討会に焦点をあてて述べている６件の文献を分析対象とし、表１．にまとめた。

結果より、CNS の事例検討会は、CNS の実践事例の検討を通し、ケアの質の向上や CNS 間の交流に貢献していた。課題としては、参加のしやすさや、実践・教育に活かせるような事例検討会の質の充実が挙げられていた。それらの課題を解決するためには、実践知を言語化し、共有可能な知とする研究に取り組み、公表していく必要性が示唆された。

(2)専門看護師の事例検討会の実態調査：

インタビューの平均時間は、平均 84.2 分（範囲：60-107 分）であった。精神 CNS のファシリテーターの経験として４つのテーマが抽出された。テーマは、【事例提供者のニーズに合わせた進行とエンパワメントを意識する】ことを大事にしており、【事例検討会がピアサポートとして機能し参加者が収穫を得られるよう配慮する】【場のダイナミクスを捉えてファシリテートの方法を変化させる】【事例検討会の成果から次につながる課題を見出す】であった。ファシリテーターは、事例提供者である CNS の問題解決に焦点を当てていた。また、ファシリテーターは、事例検討会の参加者同士のピアサポートを活かし、事例提供者で

ある CNS の成長を促していた。

表１．CNS の事例検討会の概要

著者	主な参加者	事例検討会の目的	事例のテーマ	事例検討の内容	実施結果	課題
森本ら (2011)	がん看護CNS	意見を交わし、相互に成長を深める	がん看護CNSとしてがん患者・家族に係わる複雑な問題を含む事例	いかに患者・家族に質の高い看護援助を提供すべきか、果たすべき的確な看護援助とは何かについて討議する	客観的にCNS自身の行動を意識し振り返る機会を得た	事例検討会の質の充実を図りたいと考えている
高橋ら (2015)	院内のがん看護CNS	看護計画立案と実施及び評価のスキルの向上	がん看護CNSの実践事例	実践、調整、倫理調整に関する事例の検討が多い	実践を言語化し、減少を洞察する力を養い、相互に成長を支援する	研究や役割開発に関する検討の場として期待したい
樋河ら (2018)	A地区の他分野のCNS/CN	同じ地域で活動するCNS/CNが他分野でつながる研究会を開催する	在宅・施設におけるCNSの困難事例	病院、在宅で働く看護師の実践活動からディスカッションする	他分野の専門性からの意見を述べることで参加者のエンパワメントが高まった	参加しやすい状況を作り、学習内容を実践に活かせる方策を考える
井上ら (2019)	多領域のCNS	CNSとして役割を果たす中で直面する多くの課題について検討し、それらの解決に向けた方策を明らかにすることによってCNSが相互に成長を深める	CNSによる実践の困難事例	事例提供を提供するCNSが介入に至った経緯、事例の背景や看護問題、看護目標、看護計画と評価、討議したい内容を提示してグループ討議をする	互いの専門性の向上、スーパーバイズを受ける機会となる、情報共有や連携の場となり、CNSの新たな活動を見出せる場になっている	事例提供者および参加者の負担軽減策の検討、修了生と教員の連携の強化
和田ら (2019)	がん看護CNS・CNと他領域のCNS	がん患者の困難事例において解決可能なケアの方向性を見出し、がん領域のCNS/CNの実践の質を維持・向上する	がん看護CNSの困難事例	がん患者の困難事例におけるＣＮＳの実践を、文献をもとに作成した事例提供用紙を使用して検討する	客観的な分析、理論に基づく分析、各領域の専門的知見を得る、視野の広がり、問題の明確化、実践に繋がる、事例に向き合う力を得る、心理的負担の軽減、情報共有、役割開発	開催環境の整備、関連部署の参加、成果を出す、教育的な利用
畑中ら (2019)	慢性疾患看護CNS		慢性疾患看護CNSの実践事例	E.ウェンガーの実践コミュニティを活用し小グループ制で事例検討する	難問解決の場、問題アプローチへの自信になる、後れを取らないようにするネットワークである、自らの価値と可能性を高める場等	実践コミュニティの発展的な活用を検討すること

(3)事例検討：

①職場不適応となった看護師の精神状態の悪化を防ぎ職場復帰を可能にしたリエゾン精神看護専門看護師の即応的なメンタルヘルス支援

相談者の職場復帰を可能にした専門看護師のメンタルヘルス支援は、以下の４つの大見出しにまとめられた。初回面談時に【LN の味方としての役割を伝え相談者が安心できる関係性を築く】配慮をすることで協働して問題を解決する関係を築いた。次いで【困っていることを入り口に相談者の問題の本質を掴む】ことにより、状態を悪化させない方法を提案し、【相談者の状態を悪化させず自分のこととして取り組めるように働きかける】よう支援を実施した。また、休職した相談者の回復に合わせて希望を聞き【多角的な見立てをもち復職に向けて組織に戦略的に介入する】ことで復職を調整できた。

これらのことから、この事例では、LN が、早期から相談者と組織の両方と良好な関係性を保ち、精神状態に合わせて段階的に主体性を取り戻して問題に取り組めるよう即応的に介入した支援が、重症化を予防し、短期間で職場復帰を可能にしたと考えられた。

②心身の不調が生じやすい看護職に対するリエゾン精神看護専門看護師による長期的な支援

相談者が心身の不調と付き合いながら仕事を継続することを支えた専門看護師のメンタルヘルス支援は、以下の６つの大見出しにまとめられた。まず＜LN を見定めようとしている相談者の期待に応じ信頼してもらうために、相談者の話したいことを取り扱う＞姿勢を

示し、関係を築いた。そして＜困りごとが漠然としている相談者の真意を引き出し、明確化する＞かかわりを重ね、相談者を主体とした支援に徹した。。経過の中で生じた＜相談者の頼りたい感情には、特性、心身の状態、職場のサポートを冷静に整理し、応じる範囲を決める＞ことで、過剰な介入にならないよう心がけた。また＜相談者の他では出せない感情の発散に、共に没頭する時と現実に引き戻す時のメリハリをつけ付き合う＞支援により、相談者が冷静さを取り戻し、職場に戻ることを支えていた。さらに＜心身の調子が悪い中でも自己決定ができる相談者を尊重しながら、休職と復職のペースを作る＞ことで、相談者が心身の不調に対処しながら休職と復職を選択し、仕事を継続することにつながった全ての時期において＜LN が抱え込まず、相談者が安心してサポートが得られるように周囲の環境を作る＞という調整を継続していたことが明らかになった。

これらのことから、仕事の継続のために長期的な支援を要する相談者に対して、関係性を維持しながら、困りごとをその都度明確にし、支援を継続していた。また相談者が安心できる環境を整え、LN は最後に相談できる人として継続的に支えていた点が効果的であった。相談者の特性や部署の状況を見極めながら、信頼関係を基盤に支援を展開していく重要性が示唆された。

③患者への対応に悩む看護師から寄せられた相談を起点とした精神看護専門看護師による複合的な実践

専門看護師による複合的な実践は、5 つの大見出しにまとめられた。LN は、相談者である看護師が十分に話せたと感じられるまで時間をとり＜出会いの瞬間からじっくりと信頼と安定の関係性をつくる＞ことから始め、相談者の視点にたってその力を信じて慎重に＜相談者が患者の抱える苦悩へと視座を戻していく過程に寄り添う＞ように応じていた。一方で、相談者が患者への対応を抱えこみすぎないよう＜患者に関わるチームの足場を一気に固め＞、タイミングを逃さず、関係者で目指す方向性を共有する場をつくっていた。その後は、LN 自身もチームの一員として B さんの傷つきに影響していた医療者の対応について謝罪し、＜患者との信頼関係を築き、心の扉が開くのを待つ＞実践をしていた。そして、心の扉が開いたことを確認した後、＜患者と過去をたどり、心の奥にある傷に届くケアを一緒に丁寧に行う＞面接を継続するなかで、患者が心の奥底にある感情を語り、整理する過程を見守っていた。

そのため、専門看護師による複合的な実践の大枠は、看護師からの相談を入口に、最終的には患者自身が心の傷を癒せるように信頼関係を構築しながら介入し、患者自らが語るなかで変化していく過程を見守ることであった。これを可能にするためには、LN もチームの一員として、ケアに困難感を抱く看護師が患者のケアに向かえるように丁寧に対話を図ること、一気にチームでケアの方向性を見据えて足場固めをするといった、多面的かつ状況に応じた緩急のある支援が必要であることが示唆された。

(4) 専門看護師の実践知の伝播・継承を促進する事例検討モデル

「専門看護師の実践知の伝播・継承を促進する事例検討モデル」は、フェーズ 1：【事例検討の準備】において、事例の経過と看護実践についてのワークシートを作成し、フェーズ 2：【看護の意図と実践の言語化】では、シートをもとに自分の実践をメンバーに語り、メンバーからの問いかけによる実践の意図の言語化を行い、フェーズ 3：【看護の意味・エッセンスの表現】では、大見出し・小見出し・具体的実践について検討することで看護の意味を表現し、フェーズ 4：【学会発表】において、表・抄録・発表原稿の作成と精錬をする段階

によって構成された。このモデルを用い、「患者への対応に悩む看護師から寄せられた相談を起点とした精神看護専門看護師による複合的な実践」について、専門看護師 4 名および事例研究の専門家 1 名のグループにより事例検討を重ねて検証した。事例検討のプロセスにおいてそれぞれのフェーズの内容を確認し、円滑に進めるためのポイントをまとめてモデルとして精錬し、学会にて発表した。発表したモデルに対し、参加者より「自施設で事例研究を行う場合にどのような工夫が必要だと思うか」その障壁や困難さ、乗り越えるための方策について意見を募り、モデルの精錬に活かすことができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 嵐 弘美，異儀田 はづき，池田 真理，山内 典子，寺岡 征太郎
２．発表標題 職場不適応となった看護師の精神状態の悪化を防ぎ職場復帰を可能にしたリエゾン精神看護専門看護師の即応的なメンタルヘルス支援
３．学会等名 第9回日本CNS 看護学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 異儀田 はづき，嵐 弘美，池田 真理，山内 典子，寺岡 征太郎
２．発表標題 心身の不調が生じやすい看護職に対するリエゾン精神看護専門看護師による長期的な支援
３．学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Hiromi Arashi;Seitaro Teraoka;Hazuki Igita;Noriko Yamauchi;Mari Ikeda
２．発表標題 Experiences of Psychiatric Certified Nurse Specialists as facilitators of Case conference meeting in Japan
３．学会等名 26th East Asia Forum of Nursing Scholars（国際学会）
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 嵐弘美、異儀田はづき、山内典子、寺岡征太郎、池田真理
２．発表標題 専門看護師の事例検討会に関する文献検討
３．学会等名 東京女子医科大学看護学会 第17回学術集会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	異儀田　はづき (Igita Hazuki) (70601293)	東京女子医科大学・看護学部・助教 (32653)	
研究分担者	山内　典子 (Yamauchi Noriko) (10517436)	東京女子医科大学・看護学部・臨床講師 (32653)	
研究分担者	寺岡　征太郎 (Teraoka Seitaro) (30626015)	和洋女子大学・看護学部・准教授 (32507)	
研究分担者	池田　真理 (Ikeda Mari) (70610210)	東京女子医科大学・看護学部・教授 (32653)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関